



Title	シェイクスピアのソネット147番における平行構造とメタファー
Author(s)	岡部, 未希
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シェイクスピアのソネット 147 番における平行構造とメタファー

岡部未希

1. はじめに

本稿では、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564–1616) の『ソネット集』から 147 番を取り上げ、平行構造とメタファーの観点から考察する。147 番は愛や欲望を主題としているが、シェイクスピアのソネットの中には類似したテーマを用いているものがある。そこで、118 番と 129 番を比較対象とし、各詩で使われているメタファーの類似点や相違点を探る。さらに、147 番の 4 つの日本語訳を比べ、最後に筆者による翻訳案を記す。

2. ソネット 147 番とその解釈

詩の構造やレトリックを分析する前に、詩をじっくりと読み、丹念にその解釈を行いたい。ソネット 147 番のテキスト本文は以下の通りである。尚、シェイクスピアの『ソネット集』は編集者によって記号の使い方等が異なるのだが、本稿では Evans (ed.) (2006:100) を底本としている。

My love is as a fever, longing still
For that which longer nurseth the disease,
Feeding on that which doth preserve the ill,
Th'uncertain sickly appetite to please.
My reason, the physician to my love,
Angry that his prescriptions are not kept,
Hath left me, and I desperate now approve
Desire is death, which physic did except.
Past cure I am, now reason is past care,
And, frantic mad with evermore unrest,
My thoughts and my discourse as madmen's are,
At random from the truth vainly expressed:
 For I have sworn thee fair, and thought thee bright,
 Who art as black as hell, as dark as night.

私の恋 (“My love”) という書き出しから想像できる通り、これは恋の詩である。『ソネット集』の前半においてシェイクスピアが愛を捧げる相手は美貌の青年だったが、後半 127 番以降は一般に「黒い女」と呼ばれる女性となる。147 番でも最終行に、黒い (“black”)、暗い (“dark”)、という形容詞が使われており、語り手 (“I”) の恋の相手 (“thee”) はその「黒い女」であることが推察される。ただ、その恋は夢見心地で幸せに浸るような、ぬるま湯の恋ではなく、喩えるならばまるで熱病 (“fever”) という病気 (“ill / disease”) のようだ、と言う。しかも、すぐに治るような病気ではない。気まぐれで病的な欲 (“Th' uncertain sickly appetite”) を満たすために、病気自身が病気を養うようなものを欲しがり、病気を長引かせるものをバクバクと食べてしまう。その結果、語り手はずるずる長引く恋という病に犯され続けているのである。

5 行目の第 2 連から、恋患いに対する医師 (“physician”) が登場する。その医者は語り手の理性 (“My reason”) なのだが、せっかくの処方 (“prescriptions”)、すなわち禁欲を患者 (“I”) が守らないことに怒って、語り手を見放してしまった。それに絶望した語り手は、医術が禁じた (“physic did except”) 肉欲 (“desire”) は死をもたらすのだと、今身をもって知る。

9 行目は柴田 (2004:136) が「‘Past cure, past care’ (「治りっこないものは諦めろ」) という諺だがここでは意味の上で逆の順序に変形されている」と指摘しているように、諺をもじった表現である。すなわち、理性が見放してしまったら、もう治る見込みはない。その結果、常に不安に苛まれ、錯乱状態になり (“frantic mad”)、思考も言葉も狂者のようで、真実からかけ離れたことを愚かにも手当たり次第に語った。

というのも、恋する相手を美しい (“fair”) と誓い、輝かしい (“bright”) と思ったのだが、実のところその女は、容姿も心も地獄のように黒く (“as black as hell”)、闇夜のように暗い (“as dark as night”) のだ。このように真実とは異なることを口走ってしまうから、語り手は病気でいよいよ狂っていると言わざるをえない、という結論である。

このソネットでは「恋」を「病氣」にたとえており、そのイメージを鮮明にするかのように詩全体に「病氣」に関係する語が散りばめられている。また、4行目の“appetite”は「食欲」と「性欲」の掛け言葉で、高松（1986:273）は、第1連の病を長引かせるもの（“that which longer nurseth the disease”）は「具体的には女の肉体をさす」と解釈している。「恋愛」を「病氣」にたとえるメタファー、そして「性行為」を「食事」に見立てる比喩はソネット118番にも見られる。また、愛と肉欲の関係性はソネット129番でも語られている。各比喩の詳細な分析は第4節で、他のソネットとの比較は第5節で行うとして、次節ではそれに先立って、147番で用いられているレトリックに着目したい。

3. ソネット147番のレトリック

本節で着目するレトリックは以下の7点である：頭韻（alliteration）、同一語源の異形の繰り返し（polyptoton）、行またがり（enjambment）、対句（antithesis）、平行構造（parallelism）、繰り返し（repetition）、同じ語（形態素）だが異なる意味をもつ語の繰り返し（antanaclasis）。

まず、頭韻について以下のように表にまとめた。表1は、ソネット147番のどの単語がどの音で韻を踏んでいるのかを示している。単語の後の（ ）は単語が位置する行数を表す。

頭韻	単語
[l]	love (1), longing (1), longer (2)
[d]	desperate (7), Desire (8), death (8), did (8)
[p]	Past (9), past (9)
[k]	cure (9), care (9)
[m]	mad (10), My (11), my (11), madmen's (11)

表1 ソネット147番の頭韻

面白いことに、頭韻を踏んでいる単語はこの詩の中で重要な位置を占めるものばかりである。特に[d]の頭韻は詩の中心概念である病氣（“disease”）にも繋がる。そこで、これらの単語を繋ぎ合わせてみよう：「おれの恋は長引く病氣、絶望して実証したのは肉欲がもたらす死、見放されてもう治る見込みはない、そして狂ったおれ」これだけで詩の大意となっていることが感じられるだろうか。読者が詩を読み上げると、ストーリーの鍵となる言葉に耳が引っ掛かりを覚えるようになっているのである。

次に、5行目の“physician”と8行目の“physic”は同一語源の異形の繰り返しである。頭韻というほど2つの単語は近いところに配置されていないのだが、やはり音を意識したのであろう。これが、どちらかを“doctor”や“medicine”などに変えると、音の繋がりは絶えてしまう。

ソネット147番にいて行またがりが出てきているのは1箇所だけである。すなわち、7行目から8行目の“...and I desperate now approve / Desire is death, ...”という部分だ。絶望した語り手が何かを実証したのだと言い、その内容を後出しすることで、肉欲が死をもたらすことが語り手にとってどんなに衝撃的な事実だったかが分かる。

また、最後の2行では対句が使われている。“fair”は“black”、“bright”は“dark”と対になっておりどちらも色や明るさに関する語だが、これらには3つの対比的意味を暗示している。まず「色白で金髪の」と「黒色の」という客観的な容姿に関するもの、次に、容姿が「美しい」「醜い」という外観の美醜に関するもの、最後に心が「善い」「悪い」という道徳的価値観に関するもの、である。2つの対句で3つの意味を含意する重厚な構造になっている。

筆者がこの詩において特に着目すべきだと考えるレトリックは、平行構造である。ソネットは1から4行目、5から8行目、9から12行目、13・14行目で、それぞれ4つの連に分けることができるが、147番はどの連も1文で成り立っている。そして詩をじっくり眺めると、詩全体を通して“and”と“;”を使い2つのものを並列するような平行構造が見受けられる。加えて、同じ語、同じ概念の繰り返し（“my”, “disease / ill”, “appetite / Desire”, “that which”, “past”, “thee”, “as”）や、同じ語（形態素）だが異なる意味をもつ語の繰り返し（“mad / madmen's”）も見られる。特に近い位置での2回の繰り返しが多く、全体の平行構造を意識したものと思われる。また、第2連と第

3連では、“my reason”、“I”、“my thoughts and my discourse”がどのような状態（感情）でどのような行動をしたのか、状態と動作が並べられていることにも着目したい。

このように詩全体が並列・対比の形式をとることで、愛というどうしようもない熱病を患っている「おれ」とその愛の治療を放棄した「理性」の対比、ひいては、恋をする「おれ」と恋される「おまえ」の対比が浮かび上がってくると思われる。

さらに、詩中で2箇所、この平行構造が崩れており、「作品内部での逸脱（internal deviation）」（Leech and Short 2007:48）が見られる。すなわち、4行目の“Th’ uncertain sickly appetite to please.”と、10行目の“and, frantic mad with evermore unrest,”である。「（おれの愛の）気まぐれで病的な欲望」の様子や「（おれが）常に不安に苛まれ錯乱状態となっている」様子を語るときには、詩も気まぐれで狂ったように、形式的な構造を崩している。

これらを図にまとめると、以下のようになる。図1はLeech and Short（2007:48）を参考に作成した。一部語順を入れ替え、（ ）で単語を補っている。①②③④は連の番号を表している。また、同じ語・形態素・概念の繰り返しがある場合、□で囲み字にしている。

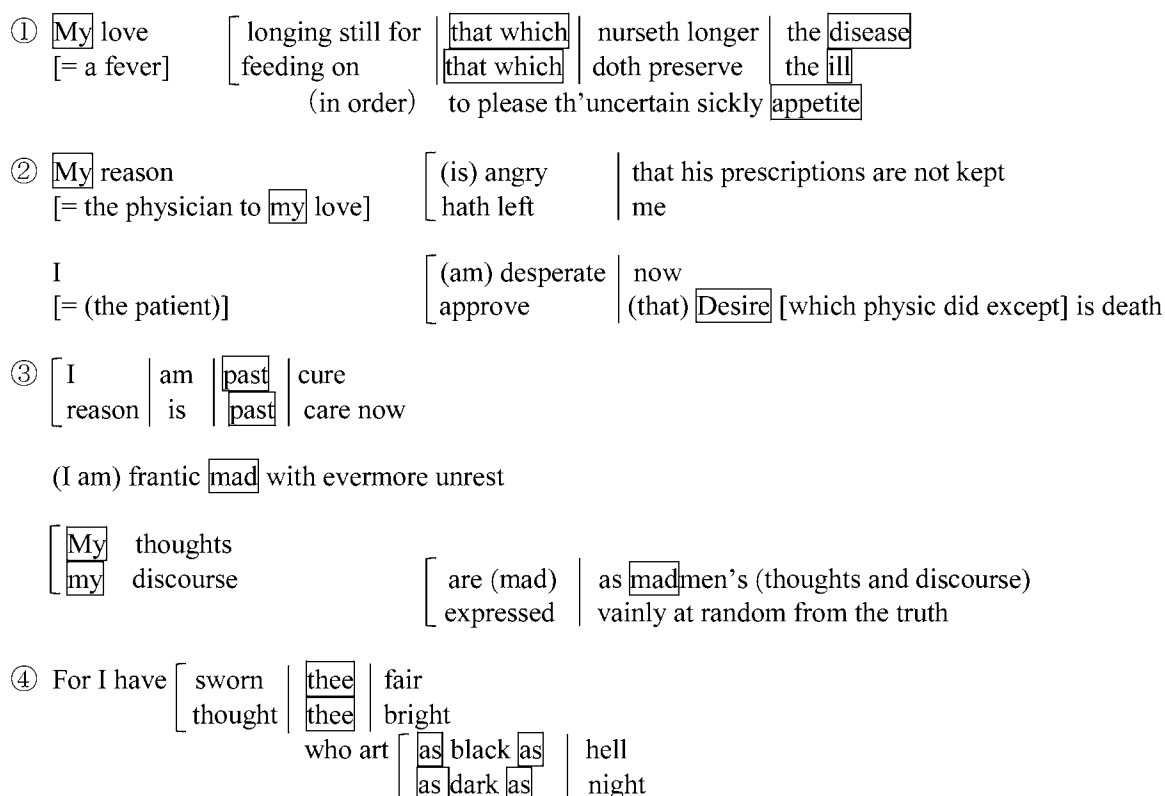


図1 ソネット147番の構造

4. ソネット147番の比喩

4.1 <愛は病である>

本節ではこの詩で使われている比喩の考察を行う。先に述べた通り、詩全体に「病気」に関係する語が散りばめられている（“fever”, “disease”, “ill”, “sickly”, “physician”, “prescriptions”, “death”, “physic”, “cure”）。そして“My love is as a fever”という直喩（simile）や、“My reason, the physician to my love,”という隠喩（metaphor）を織り交ぜながら、詩全体を通して<愛は病である>という比喩が使われている。起点領域と目標領域の対応関係は以下の表の通りである。

連	起点領域：病 (“sickness”)	→	目標領域：愛 (“love”)
①	病気：熱病 (“a fever”) (=病気になると体温が上がる、 顔が赤くなる) 患者 (=病気を治したい) 病を長引かせるもの (=薄着、外出など) を 欲しがる (“longing …”)		女に対する愛 (“My love”) (=興奮すると体温が上がる、 顔が赤くなる) 語り手 (“I”) (=女への恋情を断ち切りたい) 愛を深めるもの (=女の肉体 / 性行為) を 切望する
②	医者 (“the physician”) 医者が処方箋 (“prescriptions”) を出す 患者は処方を守らない 医者が禁止したものを摂取すると死 (“death”) に至る 医者が治療を放棄する (“hath left me”)	→	理性 (“My reason”) 理性が禁欲を命じる 語り手は禁欲を行わない 理性が禁じた淫欲 (“Desire”) を満たすと 身が破滅してしまう 理性を失う
③	→病気が治る見込みはない (“Past cure I am”) 患者は気が狂って譫言を言う		→女に対する愛がなくなる見込みはない 語り手は気が狂って (“frantic mad”) 譫言 を言う (“At random from the truth vainly expressed”)
④	(=現実とは異なる妄言を言う)		(=本当はそうではないのに、自分が恋す る女を美しいと言い輝かしいと思う)

表2 比喻＜愛は病である＞の対応関係

愛を熱病という病に喩えるこの比喻は、病気になると体温が上がって顔が赤くなるように恋をして興奮すると体温が上がって顔が赤くなる、という類似性が動機づけとなっている。病を患う患者は語り手自身で、医者にかかっていることから、おそらく病気を直したい、つまり女への恋情を断ち切りたいと望む思いはあるものの、結局病を長引かせるものを自ら欲してしまう。恋愛で言うところの愛を深めるもの、つまり女の肉体、性行為のことである。

第2連では理性という医者が登場し、禁欲の処方箋を出すのだが、患者である語り手はそれを守らない。禁じられた淫欲を満たすと身の破滅を引き起こすのだと自ら実証してしまう。医者が治療を放棄する、とはすなわち、語り手が恋に溺れて理性を失ってしまったことを表している。

第3連では、理性という医者が見放してしまったら病気が治る見込みはない、つまり、どうしても女に対する愛がなくなる見込みはない、と語り手は嘆く。死に至る病に絶望すると、患者は気が狂って譫言を言うようになる。同様に、語り手は現実とは異なるのにもかかわらず、女を賛美する言葉を紡ぐのである。

4.2 <愛はむさぼり食う者である>

147番では、愛は病であるだけでなく、性行為をむさぼり食う者でもある。そこで、<愛はむさぼり食う者である>という比喻が立てられる。ここでの愛は擬人化 (personification) されている。

連	起点領域：むさぼり食う者 (“devourer”)	→	目標領域：愛 (“love”)
①	むさぼり食う者は食欲 (“appetite”) を満た したい 食べ物を食べる (“feeding on…”)		恋した人は淫欲 (“appetite / Desire”) を満 たしたい 性行為をする
②	→食べ過ぎると死ぬ (“death”)	→	→性行為に溺れすぎると身が破滅する

表3 比喻＜愛はむさぼり食う者である＞の対応関係

この比喩は“appetite”が「食欲」と「淫欲」の2つの意味を併せ持つ語であることや、食事でも性行為でも、口を使う動作が共通していることなどが動機づけとなっている。食欲を満たそうと思う人は食べ物を食べるわけだが、食べすぎると死んでしまう。同様に、恋をしたら淫欲を満たしたいと思って性行為をする。しかし、その行為に溺れすぎると身が破滅してしまうのである。

5. その他の sonnet との比較

5.1 食と病気のメタファー：ソネット 118 番

本節では、ソネット 147 番と他のソネットを比較し、その類似点や相違点を考察する。まず、ソネット 118 番を比較対象とし、特にメタファーに着目したい。以下に示すのはソネット 118 番のテキスト本文である。日本語訳は高松（1986:163-164）によるものである。

Like as to make our appetites more keen
With eager compounds we our palate urge,
As to prevent our maladies unseen
We sicken to shun sickness when we purge:
Even so, being full of your ne'er-cloying sweetness,
To bitter sauces did I frame my feeding,
And, sick of welfare, found a kind of meetness
To be diseased ere that there was true needing.
Thus policy in love, t'anticipate
The ills that were not, grew to faults assured,
And brought to medicine a healthful state
Which, rank of goodness, would by ill be cured.
But thence I learn, and find the lesson true,
Drugs poison him that so fell sick of you.

ひとは、欲望をいっそう研ぎすますために、
からい前菜で味覚を刺戟しもするし、
まだ兆候も見えない病いをやりすぎすのに、我から
下剤をかけて病気になり、病気を避けることもする。
私も同じで、飽きようはずのないきみの優しい甘さに
腹ふくれたから、からい薬味に口をあわせたのです。
幸福に食傷したから、本当はその必要がないのに、
この辺で病気になっておくのがよかろうと考えたのです。
こうして、ありもしない病気に備えた
愛の方策が、ほんものの病いをつくりだし、
健康な体を薬づけにしてしまった。これも体に
幸福がありあまり、病気で治そうとしたせいなのです。

でも、おかげで私はまことの教訓を学んだ。つまり、
こうして君に飽いた男には薬もまた毒になる。

ソネット 118 番は 14 行も使って浮気の言い訳をしている詩である。「君の愛に満足している」と繰り返し言うが (“being full of your ne'er-cloying sweetness”, “sick of welfare”, “rank of goodness”, “so fell sick of you”), その状態は「病気」 (“sick”) であり、他人と関係を持って治す必要があったのだ、と主張する。

まず、我々人間は食欲 (“appetites”) を鋭くするためにわざわざ辛い薬味 (“eager compounds”) で味覚 (“palate”) を刺激することがあるだろう、と言う。そしてまだ兆候もない病気 (“maladies unseen”) を防ぐためにわざわざ病気にかかることもあるだろう。下剤を服用して (“purge”) 一時的には病気になる (“sicken”) が、腹の中で悪さをする可能性のある要素を取り除くことで、病気を避ける (“shun sickness”) ことになるのである。

続く第 2 連で、これらの一般論を語り手は自分の浮気の言い訳に使う。恋人の優しい甘さ (“sweetness”) で満腹 (“full”) になってしまったから、味覚を刺激しようとして苦い薬味 (“bitter sauces”) に手を出してしまった。つまり、恋人との満ち足りた恋愛に飽きたから、別の愛人と関

係を持ってしまったのだ。5行目で恋人には飽きるはずもない(“ne’er-cloying”)と言っているが、実際には語り手が恋人との関係に飽きていることが窺える。また、同じことを病の比喩を使って言い換える。恋人との健全な生活に満ち足りてもはや病気であった(“sick of welfare”)から、そのマンネリという病気を治そうとしてわざわざ他の人と関係を持つと言う病気になった(“To be diseased”)のだ。しかし、その治療薬(“Drug”)は本物の病気(“faults assured”)を生んでしまい、結局は毒(“poison”)だったわかった、と語り手は言う。

147番・118番のどちらの詩でもく愛は病気である>というメタファーが使われているが、その細部は異なっている。147番では理性という医者が病気を治す処方として禁欲を命じていたが、118番では恋人とのマンネリという愛の病気を治す方法は、恋人以外と関係をもつという他の愛の病気なのである。しかしその治療法は結局本物の病を生み出してしまったと言い、語り手がその愛人との関係に逆に嵌ってしまったことが示唆されている。

また、147番ではく愛はむさぼり食う者である>というメタファーをたてたが、118番ではく愛は味覚である>。どちらにも共通しているのは、このメタファーが「食欲 / 肉欲」両方の意味ももつ“appetite(s)”という単語を中心に成り立っており、「食べること」を「性行為」に見立てている点である。

連	起点領域：病 (“sickness”)	→	目標領域：愛 (“love”)
②	病気 (“sick of welfare”) を治すために (“be cured”) あえて病気になる (“To be diseased”) という治療を試す	→	恋人との満ち足りた関係に飽きた状態を打破するために 他人と関係をもってマンネリ解消を図る
③	本当の病気 (“faults assured”) になってしまう		愛人との関係にハマってしまった

表4 比喩く愛は病である>の対応関係

連	起点領域：味覚 (“palate”)	→	目標領域：愛 (“love”)
②	美味に飽きる (“full of … sweetness”) 食欲 (“appetites”) を研ぎすますために、 ぴりっとした味で (“eager compounds / bitter sauces”)	→	恋人との満ち足りた恋愛に飽きる 肉欲 (“appetites”) を研ぎすますために、 他人と関係を持って
①	味覚を刺激する (“we our palate urge”)		恋心を刺激する

表5 比喩く愛は味覚である>の対応関係

5.2 愛と肉欲：ソネット 129番

続いて、愛と肉欲について語るソネット 129番と、本稿の主題である 147番を比較したい。以下に示すのが 129番の本文であり、日本語訳は高松 (1986:177-178) によるものである。

Th’expense of spirit in a waste of shame
Is lust in action, and till action, lust
Is perjured, murd’rous, bloody, full of blame,
Savage, extreme, rude, cruel, not to trust,
Enjoyed no sooner but despisèd straight,
Past reason hunted, and no sooner had,
Past reason hated as swallowed bait
On purpose laid to make the taker mad:
Mad in pursuit, and in possession so,
Had, having, and in quest to have, extreme,
A bliss in proof, and proved, a very woe,
Before, a joy proposed, behind, a dream.

All this the world well knows, yet none knows well
To shun the heaven that leads men to this hell.

恥ずべき放埒のあげくに精気を消失すること、これが淫欲の行為というものだ。また、行為に至るまで、淫欲は偽証や、殺人や、流血をこととし、数多くの罪を犯し、野蠻、凶暴、残忍、無慈悲にして、とうてい頼みがたい。人はいったんこれを享樂しおわれれば、たちまちにして蔑む。分別を打ちやっけて探し求めても、手に入れてしまえば、分別を打ちやっけて憎む。人を狂わせるために仕かけた餌を呑みこめば、こうもあろうというように。追いもとめる時が狂乱の態なら、手に入れても狂乱の態。行為の後も、最中も、これからという時も凶暴のきわみ。体験の最中は至福を味わうが、体験の後には悲しみだけが残る。前方には歎びが見えても、ふりかえれば一片の夢にすぎぬ。世の人だってそれはとくにご存知だが、こういう地獄に人をつれこむ天国を避けて通るすべは、誰も知らない。

この 129 番の詩によると、淫欲 (“lust”) は呑み込む人を狂わせる罠 (“swallowed bait / On purpose laid to make the taker mad”) のようなものである。男は理性なく淫欲を求め (“Past reason hunted”)、手に入れた後も理性なく嫌悪する (“Past reason hated”)。追い求める時も、手中に収めた時も、男は狂っている (“Mad in pursuit, and in possession so”)。行為の最中は至福を味わうが、事が終われば悲惨なものだ。その事実を誰もが知っているのにも関わらず、天国へと誘う地獄の穴を避ける術は知らないのである。

肉欲が人を狂わせる罠だと知っていながらうかうかと嵌ってしまう様子は、147 番の語り手が理性という医者 of の言うことを聞き流して、恋した悪い女との行為に嵌り、恋患いが長引いてどんどん気が狂っていく様子に類似している。

6. ソネット 147 番の日本語訳

最後に、これまでの考察を踏まえていくつかの日本語訳を比較し、筆者の試訳を示したい。まず、比較する日本語訳は中西 (1976:296-297) 訳、高松 (1986:201-202) 訳、柴田 (2004:137) 訳、大場 (2018:325) 訳の 4 点である。以下に出版年順に示す。

(中西訳)

私の恋はまるで熱病のようだが この病気が
いつでも長びくように 私はつねに願っている
移気で病的な欲望を満足させようと 私は
病気を温存させて それをいのちの糧としている

私の恋の主治医をつとめる 私の理性は
彼の処方を守られないことに 腹を立てて
私の¹見放してしまった-医術をこぼむ欲望が
死にいたる病であることを 絶望の思いで私は悟る

なおる見込みのない病気を 理性はかまってくれず
つる不安に 私は精神錯乱の状態におちいり
思うことも言うことも すべては気狂い沙汰で
真実を見失って あわれや支離滅裂のありさま

¹ 原文ママ

それというもの 光り輝く美女と信じていた君が
その実 地獄よりも夜よりも 暗くそして黒いからのこと

(高松訳)

私の愛は熱病のようなものだ。いつでも、
病気をなおさら養い育てるものを欲しがり、
患いを長引かせるものを食べて、
気まぐれで、病的な食欲を満たしている。
私の理性がこの愛をなおす医者なのだが、
処方をももらぬと怒って、私を見捨てた。
病状は絶望におちいり、私は薬をこぼむ欲望が
死にひとしいのをこの身で知った。
理性に見放されたからには回復する見込みはない。
私はたえず不安にさいなまれて錯乱している。
わが心も、言葉も、狂人のそれと同じで、
ひどく的是はずれなうえ、愚にもつかぬ話しぶりだ。
おまえは地獄のように黒く夜のように暗いが、
私は美しいと誓い、輝くばかりと見たのだから。

(柴田訳)

ぼくの恋はまさに熱病だが、しかし病いを養って、
わざと長引かせることに執心しているような熱病だ、
間歇的に起こる病的な欲望を満たすために、
いつまでも病み続けることを糧としている。
ぼくの恋患いを癒すはずの理性という医師は、
処方した治療法をぼくが守らないのに怒り、
ぼくを見捨ててしまった。絶望したぼくは、
医師が禁じた欲情は死をもたらすことを実証している。
理性がさじを投げてしまったのだから、もう手おくれだ。
ために、募る不安の内にぼくは狂乱状態、
考えることも発することばも狂者のそれ、
手当たり次第に埒もないことをむなしく口走る。
ぼくはあなたを美しいと断言し、立派な人だと考えたが、
実際には、地獄のようにどす黒く、闇夜のように暗い。

(大場訳)

おれの愛はまるで熱病だ、病気を癒すどころか
当の病気を養い長引かすものをひたすら求め続ける、
食欲も気まぐれ、まるで病的、
食べれば病いがますます募るばかり。
こんな愛の主治医たるわが理性は、せつかくの処方を
守ろうとせぬこのおれに腹を立て、おれを見放してしまった、
それでもうおれは自暴自棄、肉欲の念（おもい）は死であるとの教えを
実証するのに余念がない、医術が肉欲を禁じたのも蓋（けだ）し道理か。
まことに理性の看護なくてはこの身の治癒もありえぬからには、
果てない不安にただもう狂い乱れて、
思うも、語るも、すべて狂人のそれ、
真実も何も行き当たりばつたりのただ上の空。
考えてもみろよ、おれはお前を美しいと誓い、お前を明るいと信じてきた、
だが実際には地獄のように黒く、夜のように暗い。

これらの日本語訳を比較する上で検討すべき点を6点挙げたいと思う。

まず、人称の訳し方についてである。英語では誰もが“I”を用いるが、日本語では「おれ」「ぼく」「わたし」「わたくし」「うち」などと様々なバリエーションがあり、尚且つ話し手のアイデンティティを示す一材料となり得る。中西訳・高松訳では「私」、柴田訳では「ぼく」、大場訳では「おれ」と、やはり翻訳者によって採用しているものが異なっている。悪い女にたぶらかされる弱い男、ということを考えて「ぼく」でも良いと思われるが、愛に溺れた結果気が狂い、言葉も荒れてしまうと考えると、筆者としては「おれ」が一番147番の語り手の雰囲気には合うのではないかと思う。また、“thee”も「君」「あなた」「お前」と訳者によって表現が異なるのだが、最終行で、どう考えてもこの女に魅力はないはずなのに、と語り手は相手を少し見下していることを踏まえ、「お前」を採用したい。

次に、“love”を「恋」とするか「愛」とするか、という問題について。『明鏡国語辞典 第二版』をひくと、「恋」は「特定の異性（まれに同性）を強く慕うこと。切なくなるほど好きになること。また、その気持ち」、「愛」は名詞の2番目の語義に「人、特に異性を慕う心」とある。したがって、意味の上では大きな違いはない。ただし、日本語には「恋煩い」という、ある人を恋するあまり病気のようになることを表現する言葉がある。語り手は自分を病気だと言うが、彼の病名は「恋煩い」というにふさわしい。そこで、筆者の試訳でも“love”は「恋」と訳出する。

また、第3節で、147番の注目すべきレトリックとして言葉の繰り返しや平行構造を挙げた。訳文においても、できるだけその構造を再現したいと思う。大場訳の散文のような訳文はできるだけ避けたい。

さらに、脚韻の問題がある。147番は ABAB CDC'D EFE'F GG とほぼ型通りに脚韻を踏んでいる。中西訳や高松訳のように1文の長さや文末に拘っている訳はあるものの、原詩通りに日本語訳でも脚韻を再現するのは難しい。なぜなら、日本語は母音の数がかなり限られているからである。そこで、脚韻の代わりに長歌のような5・7調を意識した試訳にする。その方が読み手にとって馴染み深い音であると考えたからである。

音に関して他に注目すべきなのは、頭韻である。第3節で、詩のキーワードには頭韻が使われていることを述べた。これを反映している日本語訳は柴田訳の「狂乱状態」「狂者」、大場訳の「狂い乱れて」「狂人」などがあるものの、数としては少ないと言えよう。そこで、筆者の試訳では、頭韻[d]はヤ行音の繰り返しに変換（「やけくそ」「欲情」「黄泉」「ゆく」）、頭韻[m]はカ行音の繰り返しに変換（「狂乱」「思考」「狂ってる」「言葉」「狂者」）し、できるだけ原詩の音の構造を再現しようと試みた。

最後に、4つの日本語訳を見比べて解釈が異なる点があることに気づく。8行目“Desire is death, which physic did except.”は、「薬（医術）をこぼむ欲望」と、「医者（医術）が禁じた欲望」の2通りの解釈が成り立つ。前者の解釈を採用しているのが中西訳と高松訳、後者を採っているのが柴田訳と大場訳である。詩では語の順番に関して比較的自由度が高く、今回のケースにおいても、関係代名詞の which を主格と目的格のどちらで解釈することも可能である。ただ、後者の方が、処方を守らない患者の不摂生な生活が伝わるのではないかと考え、「医者（医術）が禁じた欲望」の解釈を採用した。

これらの点を踏まえた筆者の試訳は以下のとおりである。

（試訳）

おれの恋 まるで熱病 切々と望んでいるのは
長々と病気を育てるそんなもの、
食べているのはこんこんと病いを延ばすそんなもの、
気まぐれ膨る病的な その欲望を満たすため。
おれの理性 おれの恋診る主治医だが、
処方守らぬと腹を立て、
患者のおれを見放した、おれはやけくそ、今や実証、
医者が禁じた欲情は 黄泉に続いてゆくのだと。
理性が背けばおれは終いさ、
尽きぬ不安 そして狂乱 そのためか、

おれの思考は狂ってる おれの言葉も狂者と等し、
語るでたらめ 愚かにも真実からはほど遠し。
おまえは美し 言い切るが、おまえは明かし 信じるが、
実のおまえの黒さは地獄、暗さは闇夜。

7. おわりに

本稿では、シェイクスピアのソネット 147 番について、特に構造やメタファーに着目して考察を行った。また、類似したテーマや比喻を用いているソネットとの比較を行い、考察を深めた。さらに、147 番の日本語訳を比較し、レトリックの考察を踏まえて筆者の試訳を示した。詩を考察する際に、ひとつひとつの言葉に着目することはよくあるのだが、一步引いて全体の構造を眺めることで、より興味深い事実が浮かび上がってくるのが分かった。

参考文献

Evans, G. Blakemore (ed.) (2006). *The Sonnets*. New York: Cambridge University Press.

Leech, Geoffrey and Short, Mick (2007). *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. London: Longman.

中西信太郎 (訳) (1976). 『ソネット集：完訳』．東京：英宝社.

大場建治 (訳) (2018). 『ソネット詩集』．東京：研究社.

柴田稔彦 (編) (2004). 『シェイクスピア詩集—イギリス詩人選 (1)』．東京：岩波書店.

高松雄一 (訳) (1986). 『ソネット集』．東京：岩波書店.

(辞書)

『明鏡国語辞典 第二版』．(2010). 大修館書店.